お父さんが家出した

小野光子

水曜日、出勤する娘の亜紀、保育園に行く孫の環と私、三人が一緒に家を出ようとするからコートやらカバンで玄関はごちゃごちゃだ。

「おばあちゃん」とつぜん環が私を呼んだ。

「お父さんとお母さんが喧嘩してお父さん家出したの」と言った。

私は、傍にいる亜紀の顔を斜めに見たが、彼女は、ソラ、イソイデ、ハヤク、とか急かす言葉を掛けて、一時も早く玄関から出ようとしている。

高校生の眞一と環の面倒をみて朝帰りする私は、環の言ったことばを確かめもせず、いつものようにバイバイと手を振って別れた。

亜紀と環は、自家用車の中へ、私はバスに乗るため大通りへ足を早める。バスの座席に落ち着いたとき、別れ際に言った環の言葉が耳に蘇った。昨晩から、今朝にかけて一緒にいたときには何も言わない彼が、玄関を出るとき簡単なタッチで言ったタイミングは偶然なのか、それとも急に思い出して言わなければと思ったのか分からないが、彼にとっては胸につかえていたことを吐き出したかったのだ。

長男の眞一が生まれたときから保育園の迎えを頼まれてきた私は、娘夫婦、親子喧嘩は見飽きているが、「お父さんが家出した」ということははじめて聞く。それも厳冬といわれるこの時期、環の父、友和さんは家を出てどこへ行ったのだろう。喧嘩したのはいつなのか、何が原因なのか、時間があれば確かめることができたが、何も訊きだせずに別れてしまった。

私は、定年まで地方自治体に勤めていたので、共働きには理解があるつもりだが、民間会社に勤める娘夫婦のような多忙さは想像つかない。残業は五十時間の契約だがその倍はしている、子育て時期の夫婦にはあり得ない生活リズムだ。

私が乗った駅までのバスは十五分足らずで到着する。車内は、通勤者の流れが終わって、主婦や老人たちの時間帯になっていた。ダウンジャケットで膨れた小母さんたちは朝から元気がいい。大声で、寒さで水道が凍った。野菜が高騰したとか、現実的な話をしている。

私は、現実にもどれないまま、出がけに聞いた環の話の真意にこだわっていた。もっときちんと確かめればよかったと心残りが尾を引いている。

土曜日、保育園に環を迎えに行った。今週はこれで二回になる。

ホワイエから取っ付きの部屋に仲間四人と環は食事をしていた。いつもなら彼が最後になると聞かされていたが仲間がいるので、ホッとした。

私の顔を見ると、「おばあちゃん、急いで食べちゃうから、待ってて」大人びた声をあげた。十分と待たずに、両手にカバンをぶら下げた彼が出てきた。ズボンの膝の穴が眼についた。先週からだからほころびが大きくなっている。ジーンズの当て布を用意してきたので、今夜こそ繕ってあげられる。

厳重に施錠してあるゲートから出ると、空だけ明るく満月が出ていた。

「環ちゃん、お月様」私が指差すほうに環も背伸びして見上げた。

「ぼく、保育園で見つけたよ、ウサギさんがいた。何しているんだろう」

「ウサギさん餅搗いていると、おばあちゃんは子どものとき教わった」

いつも通る集合住宅の中、家々から灯が洩れ、肉を炒める匂いがする。窓から子どもが弾くピアノの練習曲が響く、家々は団欒の時間帯。一緒に歩く環の手を握ると掌が温かい。

「家に、お兄ちゃん、いるかな」

高校一年の眞一の帰宅を必ず訊く。いつものことで環は決して両親の帰りのことは訊かない、私の迎えの日は両親とも夜中の帰りだということを知っているから、訊いてもしょうがないと思っているのだ。

「環、お父さんは、なんで出て行ったの」三日前に聞いたことを確かめたくて、暗い道、足元に気をつけながら私は早急に訊いた。

「お母さんが帰ってきたときにお父さんが返事をしなかったから怒ったの」

「いつのこと。お母さんは、どこからの帰り」

「みんなが休んでいたから日曜日、横須賀だよ、おじいちゃんのお見舞い」

友和さんの父親が、先月の末、手遅れの胃がんで胃を全摘した。

「返事をしなかったというだけでお母さんが怒ったの、なんでだろうね」それだけで怒る亜紀の気持ちは想像つかない。

「『どうしてみんな黙っているのよ』と大きな声をあげた」

母親の声色を真似て教えてくれる。

「お父さんは、いそがしいんだと言って、二階から降りてこなかった。お兄ちゃんも勉強、ぼくだけ一階にいたから良く聴こえた」

「でも、それだけで出て行くようなこと、お父さんしないよね」

「お父さんが切れて、じゃ、出て行くと言って本当に出て行ってしまった」

「いつもあるの」

「出て行くのははじめてだよ。喧嘩はよくするけど」

「ほんとうに、はじめて家出したのね」

「お父さんはね。お兄ちゃんは時々あるけど、でもすぐ帰ってくる」

その時、亜紀は何していたのだろう。出て行く夫を止めなかったのか、それとも本気で出て行くとは思っていなかったのか。それにしても友和さんは今どこにいるのだろう、仕事には行っているのだろうか。

「でもね、僕の家、どうしてみんな喧嘩をするんだろう、ぼく喧嘩嫌いだ」

「みんな忙しいから、切れやすいのかも。でも一週間も家を空けるようなお父さんじゃないわね、なんか理由があるのかしら、どこにいるのだろう、寒いだろうに」

私は、この二、三日、娘夫婦の喧嘩を思い遣ると環が不憫で気持ちが堪えてつらかった。

次の朝、明け方に帰ってきたらしい亜紀だが、いつもの調子で今日の予定を言う。

「一日、お願いね。私は研修会だから夕方には帰ってきます。眞一は部活で帰りは当てにならない」

亜紀は脳外科病院の言語聴覚士をしている。専門技術を高めあうのか休日の研修会や学会が多い。友和さんは学校の教材を扱う会社に勤め、企画の仕事が多いので持ち帰りができる。休日は極力休み、亜紀のカバーをしてくれる共働きのモデル的な夫だと思っていた。

日中、友和さんの様子を知りたくて私は横須賀の両親に、見舞い方々電話を入れた。探りを入れることは失礼だろうが止むにやまれない気持ちになっていた。

夫の入院の経過を一通り話し終えた友和さんの母親は、何のこだわりもなく、「友和がいますから呼びましょうか」と言った。

いや結構ですと言いながらも、「そちらにいつから、ですか」とストレートに日時の確認をした。

「夫が退院する前の晩に来たから二日前ですね、退院したのはいいのですが胃の全摘で体力が弱ってしまいました。友和も心配してくれていますが、夫は、我儘ですから、誰がいても同じです。日曜日には帰ると言ってます。心配かけてすみませんでした」

母親は、友和さんが父親の看病に来てくれたのだと信じ、疑いさえ持っていなかった。もちろん彼は家出してきたと打ち明ける訳がない。彼は、週半ばまで職場の近くのホテルに泊まって仕事をしていたようだ。家を出るとき妻への脅かし半分、家出のような言い方をしたのかもしれない。亜紀は夫の心を見通していた、だからあまり心配しないで、私を頼れば週末は過ごせると思ったのだろう。一番心を痛めたのは純真な環だ、「ぼく、お父さんがいなくなったら困るよ。床屋に連れて行ってもらわなければ髪も伸びているし、キャッチボールもしたい」と嘆く。

環の気持ちが私に乗り移り、少し大げさに横須賀の母親に訴えてしまった。病人を抱えているのに、唐突でさぞ不愉快だったろう。

明日、家族が揃えば、環は喜ぶだろう。この四月、小学校に入学するのに、まだランドセルの用意もできていない。亜紀は横須賀の両親の手前、私のほうからの申し出に躊躇している。友和さんの気持ちもあるだろうが、私は一日も早くランドセルを背負った環のガッツポーズがみたい。